
女神様の落とし人

湊美耶子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

女神様の落し人

【Nコード】

N5321Q

【作者名】

湊美耶子

【あらすじ】

27歳にもなってパジャマ姿で異世界トリップ。みんなで一生懸命女神像の前で祈ってるから、きつと大事な何かがあるんだと思いきや……？

（2話から下ネタ多すぎなので一応15禁付けときました。改題したいと思いつつ、いいタイトルが思いつきませんでした。が、「女神様の落し人」で落ち着きました。ツンデレ改め歳の差属性に変更。）

第1話 女、落ちる

突如、女は異世界に落ちた。

ドチャッ

と言うそりゃーもう情けない音と

「ウギヤッ」

というかわいらしくもない悲鳴を上げて、だ。

大人数でお祈りしているところに落ちた。

落ちてから周りを見渡す余裕ができたその瞬間「裸でなくて良かった」と女は真剣に思った。

何せ落ちる前は、お風呂に入ってすっきり爽快、寝る直前！というところだったのだ。

女はかわいい黒ニャンコが踊るおニユーのパジャマを着ていた。冷え防止に、と、もこもこ靴下も履いていた。

しかし、寝れなかった。

落ちたからだ。

ベッドに入って電気を消した瞬間に「落ちた」のだ。

落ちた先では先ほどもあったように、なにやら集団で女神様のよう

な白亜の像の前で熱心に祈っていた。

落ちた女と祈る集団との勿論初めての迎合である。

呆然とするしかない両者たちであった。

それからしばらくして、一人の男が我に帰ったようであった。

その男は一言で言うなれば、偉そうだった。

理由は服装にある。

眼に飛び込んでくる色彩情報が白、緋色、黒、金と銀で、ロ可可調の男性貴族服といえは分かるだろうか、とにかく細かい刺繍で彩られているため、女にはそう思わせたのだ。

そして偉そうな上に美形だった。

今時の言葉で言えばイケメンだった。

偉そうなイケメンは優雅な動作で女に近づいていった。

足音なんて立てない。

ス、と女に手を差し出してきた。

立て、ということらしい。

女はまだ座り込んでいたのだ。

落ちたという感覚はあったのだが不思議と痛みはない。

「あ、ありがとうございま…す…」とこれ以上のイケメンに出会ったことがない緊張丸出しの女がお礼を言うと、「話ができるようで安心した」と冷静に返された。

言葉が通じないのは非常に辛い。

英語すらろくに喋れないのに海外旅行に行っちゃって簡単な買い物するにも一苦労！

のような方には言わずもがな、だろう。

恥ずかしくてイケメンをまともに見れない女ではあったが、この異世界トリップセオリー其の壱「言語はなぜか日本語」は本当に嬉しかったと考える余裕はあった。

女が「そうですね、良かった……」と安堵したところで、イケメンは「こちらも未だに何が起こったのかが理解できていない、別室で座って話をしよう」とのことだった。

別室と言われた大きい長方形のテーブルがある会議室に案内されて、イケメンの前に当たる席に案内されたのでソコに座る。

イケメンには、失礼だが兵を背後に立たせてもらうがどうか？と言かれ、女は（どうせ拒否権もないでしょうから）構わないと冷静に返すことができた。

偉そうなイケメンを筆頭に、白いフードを被ったこれまたやつぱり偉そうな魔法使いもどきや、お貴族様ですが何か？というような風貌及び服装のハゲジジイ共に、何故ココに落ちたのか？何処から来たのか？という質問をされたが、女は、分からない、知らない、という言葉ぐらいしか返せなかった。

しかし、落ち着いていたかに見えた女はココが自分の住んでいた日本でもなく、その日本のあった地球ですらなく、異世界だと確信したことによつて、だんだんと興奮してきたようだった。

両手をボールを持つような形にし、上下に振る。
顔を赤くさせ、何で自分が！と考え始めた。

「異世界に来たらさあ……こう何かあれじゃん？あるじゃん？」

やはりいきなりの異世界トリップで何故此処へ自分が連れてこられ

たのかという説明が興奮してしまい、難しい。

「……こうとかあれとか抽象的過ぎて頷けぬ。何か具体例を言うてみよ……」

一番偉そうな、美しいイケメン様が口を開く。

喋り方も優雅というか雅だ^{みやび}、おそらく王とか皇帝とかまあ、そんなやんごとなき身分の人なのだろうと女は直感で思った。

そういえば双方自己紹介とかしてない……まあ、いまさらか、とも思った。

「えと、あなたが次代の王妃です！とか、暴れ竜を説得してほしい！とか、さあ勇者よ、魔王を倒せ！とかさあ……ああ、待っておりました愛しいあなた。そう、あなたが運命の人です！とかさあ……あと何だっけ？あなたが女神です！とか、曲者め、出会えー出会えー！とか、あとは、とっておきが、これで生け贄が揃ったぞ！くつくつく！かな……？」

「ふむ。一つづつ回答しておこうか。……私が国王だ。妻はいるが、暴れ竜などは居らぬ、勇者も特に求めておらぬ。運命の人はさつきも言ったが妻がいるので別に必要ないぞ。女神もペクテーヌ様という方がいらっしゃる、しかもお前に似てない、まったく似てない。あと曲者なのは確かだが、これだけの目撃者を前にしておいて、さらに兵士を呼ぶということは危険だな。混乱に乗じ、お前が逃げやすくなるようなものだ。最後だが、この儀式は生け贄を召喚していたわけではない、女神ペクテーヌ様に国の安寧をお祈りしていたところだ、それとそんな阿呆な笑い方は余はせぬ」

やっぱり目の前のイケメンは国王だった。

異世界トリップセオリー其の式「即、国のトップに出逢える」及び

其の参「即、美形に出逢える」は難なくクリアした。

「曲者は決定かい！そして似てない2連呼だけがやったらムカつく、じゃあ何のためにここに来た、私！」

ようやく言えた。

たった10文字を言うまでが長かった。

「知らぬ」

しかし国王による返答は早かった、しかも短かった。

「ドチクショーツ！！！」

頭を抱えて後ろへ仰け反る。

髪の毛を両手でワシャワシャするのを忘れてはいけない。

「お前の世界ではソレが普通か？激しいな……」

片眉をひそめ、国王は問う…というよりは呟いた。

「27歳で異世界トリップって普通じゃないだろ！ってかあたしは基本口悪いっ！一人称も気分により適当だっ！」

えっという驚きが周りから漏れた。

国王も若干目が見開いている。

中世ヨーロッパみたいな格好をした周りの見た目からして、「えっ」に続く台詞が、「信じられないザマス！」だと女が思ってしまったことはテレビの見過ぎであって特段何の罪にも問われないだろう。

要は27歳に見えないのだ。

モンゴロイド系の顔は総じて幼く見える。

この別室に座っている者たちは国王を含め、コーカソイド系統依りの顔立ちだった。

「27か…18、9程度と想っていたのだが」

国王が周りの声なき声を代弁する。

だが、国王自身は本当は15、6に見えた……が言えなかった。なんとなく10歳以上の差は開けないほうが良かった気がしたのだ。

「人種の違いで若く見られるんじゃない……っておお、やっぱり異世界でもセオリーか。実証されたぞ、ママン！おいらはやったよ、パン！でもさすがに高校生は見えなかったよ！いやぁ良かった良かった」

セオリーとはきつと使い方からして法則とか原則とか言う意味だろうか、しかしママンとパンとは誰であろうか、学者か何かだろうか？と考える国王。

どうやら英語系の意味は通じないらしいが、女の使い方で何となくセオリーの意味はわかったようだ。

そして女の考える異世界トリップセオリー其の四は「日本人はどうしても若く見られる」のようだった。

至極どうでもいいが、あとのくらいセオリーがあるのだろうか？

……そこは追々女が説明してくれるだろう。

「ふむ、喜んでいただけたようで何よりだ。しかしだな、還してやりたいのだが、方法が今のところない」

「うああああそこはセオリー踏襲しなくてイイ！」

異世界トリップセオリー其の五が判明。

「すぐには帰れない」ようであった。

そして何故こう感情表現が激しいのだろう、日本と言う国はそんなに激しいお国柄なんだろうか。

室内の者全員が思った。

女の所為で大和撫子という言葉の意味が信じてもらえなさそうである。

「まあ、落ち着け。そんなに帰りたいたいのであれば全宮廷魔術師および個人研究魔術師にお前の帰還方法を探らせよう、とりあえず安心しろ」

このような時に権力は使われるべきだから、と以外に爽やかに笑い、国王によつて『異世界人帰還方法の探索』命令が發布された。

「うん、わかった。勝手ながら衣食住は頼みますネ！あとついでにお城の中で働くからお仕事くださいっ！あ、自己紹介！わたくし^{さい}藤歩美と申します。あ、フミが名前でサイトウは氏です、27歳独身、日本での仕事は役所で働いてました〜ヨロシクっ」

自分に自己紹介に対しても艶やかに笑んだ国王を見て「いやあ、どうにかかなりそうじゃーん」と考えた女ことフミ。

暗くなつても事態は打開しないことからフミは脳内スイッチを「明るいフミちゃん」に切り替えた。

というかもとスイッチは明るいだった気がする。

「いや……もつとしんみりしたらどうだ……」

フミはハイテンションで挨拶をし、笑みを浮かべていた国王を含め別室に集まった者全員を呆れさせた。

勿論国王だけでなく話を聞いていた別室内の誰も、否、たった一人を除いてが「コイツ順応力高すぎる……」と思った。

この場で一番若いであろう魔法使い風の男、少年よりの歳若い青年、おそらくは宮廷魔術師である。たった一人が、顔を真っ赤から真っ青と交互に変化させ、「いや、でもまさか27歳……いや、でも独身って言ったし……女神様が叶えてくれたんだよね……フミさんか……ご趣味は？とか聞かなきゃ駄目だよな？いや、まず自己紹介からか……いや年下ありですか？のほうがまず先だな……いやいやいや直球すぎるか……」と高速で呟いていたことは真白いフィードを被って口元が見えづらいこと、輪をかけて声が小さいことと、フミが通る声で自己紹介をしていた所為で、何と誰にも気づかれなかった。

どうやら異世界トリップセオリー其の六「無駄にモテる」が発動したようである。

第1話 女、落ちる（後書き）

異世界トリップ物が書きたかったんだ。

反省はしてない。

そして一話完結型で読めるように書きます。

なんせ自分が飽きると困るから。

皆様が期待してるような逆ハーにならないかもしれない…。

そして早速手直しました。

読みやすくなったかなあゝ？程度です。

第2話 女神、告げる

現代日本から異世界トリップしてしまったサイトウフミ斉藤歩美。

なんと第1話で（6つ目はまだフミ本人が気づいていないのだが）6つの異世界トリップセオリーを成し遂げることができた！

とは言っても大したことコトではない。

異世界トリップセオリー其の一：「言語はなぜか日本語」

異世界トリップセオリー其の弐：「即、国のトップに出逢える」

異世界トリップセオリー其の参：「即、美形に出逢える」

異世界トリップセオリー其の四：「日本人はどうしても若く見られる」

異世界トリップセオリー其の五：「すぐには帰れない」

異世界トリップセオリー其の六：「無駄にモテる」

の6つである。

そしてフミはハキハキと自己紹介後、この国や国王の紹介などをされている間に興奮と緊張のためか倒れ…寝てしまったのであった。

そもそもあの祈りの祭事に召喚の原因が居たのであるが彼女は知る

はずもなく、現在は夢の中。

そう、フミがドチャツと「ウギャツ」と異世界トリップしてしまった訳は至極簡単である。

フミにとっては名も知れぬ異世界の神、女神ペクテーヌ様の気まぐれで、

とある男の願い事を叶えるためだけに召喚されてしまったようなのだ。

では、その元凶達の会話を覗き見てみよう。

まだ空は暗い。

だが確実に朝が近づいている、地球で言えば午前3時頃、異世界時間：牛寅刻。うしうらのとき

若き宮廷魔術師イシュライラ・キールンの夢の中でイシュライラ自身と一人の女が対峙している。

否、イシュライラは圧倒されている。

夢の中で偉そうに女が仁王立ちしているのだ。

いや、この国は女神ペクテーヌを信仰する国なのだ、仏教用語たる仁王立ちなんて表現はない。

この国の言葉で言う足と肩幅に広げて地にしっかりと立つ、腕組

みをした女の人が立っている、だ。

女は尊大な態度で自分は神であると告げた。

「えっと……どなたでしょうか？」

「うむ、わらわは女神じゃ。お前たちの大好きな、ペクテー又様じや！」

「普通自分から女神とか言わないと思います、ので信用できません。僕の夢からさっさとお引取りください」

夢の中の青年はコレが夢だと気づいた。

気づいたというより何となくこれは夢だと理解した。

そして目の前にいる女が神であることはほんやりと理解^{わか}ってはいた。しかし、理解したくはなかった。

「ムキーツ！何じゃその言い草は！わらわがせっかくお前の、『人より早めに可愛い奥さんと結婚して、可愛い子供が欲しいです！』と願うから召喚してやったというのに！信じないならフミは元の世界に還すぞ！大体召喚されたフミを見て『いや、でもまさか27歳……いや、でも独身って言ったし……女神様が叶えてくれたんだよね……フミさんか……ご趣味は？とか聞かなきゃ駄目だよな？いや、まず自己紹介からか……いや年下ありますか？のほうがまず先だな……いやいやいや直球すぎるか……』と呟いておっただろうが！いいのか！？フミを還すぞ！還しちゃうぞ！」

青年ににべもなく信用できないと言われ、自称女神は怒り出した。まあ、この際なのではつきり言う（というか言わない）とこの話が続かないのだ。神であることは事実なのでソレを否定されれば神だつてモチロン怒るのだ。

怒り出した神はフミが落ちてきた祭事である女神祈念祭の時に青年が駄目モトでしたお願い事及びフミ召喚後の独り言をを一言一句間違えずに復唱した。

「う……その願い事を何故知って……！」

恥ずかしさで顔を真っ赤にさせる青年の容姿は、さらっさらの青い髪と灰青色の瞳。

後ろ髪は襟足部分が腰まで届くほど長く、前髪から両サイドと後ろ髪の上部は耳下から顎くらいまでに揃えられ、そんなもん似合う人間はアニメキャラだけだろっというような髪形をしている。

目鼻立ちも良く、日本にいれば母親が勝手にジャーズに書類を送ってしまいそうなお顔立ちであった。

一言で言つと美青年、まさしく現在進行形で紅顔の美青年なのである。

（まあ第1話でフミがイケメンと認めた国王の若かりし頃ほどではないんだけど。）

「だからわらわがペクテーヌだからじゃああ……もうお前なんぞ知らんぞ！フミは還すしっ！おお、そうじゃった！次はフミの護衛に決まったウィリアムの願い事を叶えてやるとしよう！そうだ、そうしよう！フミの護衛になると願い事が叶うらしいからな！おお、願い事は何々？『フミちゃんみたいなかわいいこちゃんが彼女になつてくれますように……できれば夜積極的で俺のピーをピーしてくれたり、俺のピーをピーピーピー、ピーピーしても怒らないでピーピーピーって言っちゃったり、ピーピーをピーピー……以下神規制……』ウィリアム怖っ！こいつ爽やかな顔して考えてること変態まっしぐらじゃっ！」

「規制音多すぎ！って、ウィリアム氏の性癖とかどうでもいいです。

いや、確かにホント変態まっしぐらですけどねっ、じゃ・な・く・てっ！ペクテー又様！！フミさんはホントに俺がお願いしちゃいました可愛いお嫁さん候補なのではようかつ？！」

女神の言う護衛はフミ専属の者である。

国王がフミ自身の安全と念のため監視用のために、とフミに護衛をつけることにしたのであるが、その護衛役を引き受けると女神ペクテー又様に願いを叶えてもらえるという噂が何処からともなく流れた。

そのため、志願者が多く、なかなか護衛が決まらなかった。

夜中になっても決まらず、若干飽きたのともそも寝ようとしていたため眠いらしいフミが異世界流非暴力勝負方法【ジャンケン】を紹介したのだ。

この平和的な勝負方法は国王と護衛を出す精鋭騎士団長同意の下に採用され、その勝負に見事勝ち残ったのがウィリアムとその他2人（出番無いので紹介なし！）なのである。

そして、美青年魔術師は自分の願い事が叶うため、いささか興奮している。

でも美青年なので暑苦しくない。

眼の保養なだけである。

まあ、斯様なくだらない会話の所為で女神様を本物だと信じたらしい。

そんな理解のされ方でいいのか、どうなってんだ、異世界の神……。

「候補というか確定じゃ、お前の可愛いお嫁さんはフミじゃ。フミは27じゃからな、遠慮せずに年がら年中イチャイチャするがいいわ」

女神は最初、腕を組んでいたが、それを両腰に当て変えて話を続け

る。

そして今更だが、この神様、フミの人権なんぞ完全無視である。神様の前に人権とは無意味なのだろうか、うん、そうなのだろう。

「ま、まさかフミさんは『お仕事がんばってきてね、イシユ！』とか『はい、イシユ。アーンして♪』とか『イシユ！ウ、いつてらっしゃいときはココにちゅっ♪でしょあ？』とか、最終的に『ああん、いっぱい子作りしましょあ♪』とか言ってくれたり、やってくれちゃうんですか！？」

だから人権と言う概念は……うん、異世界なのでないんだろう……うん、ソレでいいのか異世界……？

「異世界ナメんなよ。そんなもん異世界ではお嫁さんにや標準装備だ！……と言いたいが、お前の妄想もちと痛いな、最後のヤツとかマジ引くわ……」

女神の言う異世界とは現代日本のことではあるらしいのだが、お嫁さんの基準をその位置にしないで欲しい。もっと低いはずだ。

おそらくこの神様の知識元はマンガとかアニメだ。しかも男性向け寄りの。

「口調違いますよ、ペクテーヌ様！つてかフミさんはお願いすればやってくれそう……どうしよう、明日はどこで押し倒せばいいかな……？」

とりあえず押し倒すことしか考えていない。
美青年でも考えることは同じなのかああ！

「神様っぽい口調で話してもお前はわらわを嘘つき扱いぞ。つかいきなり押し倒しちゃう駄目だろーが。一応、護衛としてウィリアム達がついてるからのっ！」

神様がまともなことを言い出したが、そもその元凶はこのお方なのである。

神様から好きにして良いと言われたら大抵の人間は自分の思うがままにするはずなのだ。

「いや、口調…いえ、すみませんでした。信じます、信じます。でも俺とフミさん年齢差10歳もあるけど気にしないかな……？」

「いや、聞けよ神様のありがたい話。いきなり押し倒すなよ。あと、ココとフミの世界じゃ年齢の数え方が違う。フミもまだ気づいてないが、こちらだとフミは28歳だから9歳差。お前はフミの世界に直すと16歳。まあ、フミの世界では男16歳と女27歳の子作りは女側が犯罪者扱い。お前に対してフミからは残念ながら何もしてこないぞ、その辺の感覚は不祥事とやらの所為で格別強いからの」

要は年齢は、この異世界では数え年で現代日本は満年齢で数えるという違いであり、

フミは（元）公務員のようだから未成年のイシュライラとイチヤイチヤなんてしないぞということらしい。

「じゃあやっぱり明日押し倒してこなきゃー！」

「うん、だから話聞けよ、イシュライラ。今からアンドレア王にもフミはイシュライラの嫁でーすって言うてくつから。明日素直に王に呼び出されてろ」

「おお、そんなフミ！まだ夜には早いよ！え？我慢できないだなんて！僕もだよっ！」

妄想時間突入である。

若いつて良いな。

「うん、脳内妄想乙。完全に自分の世界入りやがった。ウィリアムと大差ないな、この色ボケ宮廷魔術師め。もう国王のところ行ってこよう……」

そう言うや否や、女神様はイシュライラの夢から離れ、アンドレア王の意識下に向かった。

現代日本でもマイナー部類な挨拶【乙】を使いこなせるあたり、この神様は異世界【日本】についての知識が偏りすぎているようであった。

「アンディ、ペクテーヌ様じゃぞい」

青年魔術師から国王の夢に移動してきた女神はアンドレアの愛称を用い、気安く声をかける。

「お久しぶりです、ペクテーヌ様。戴冠式以来ですね。もしかしてフミの件ですか？」

慌てもせずアンドレア国王はにこやかに女神を迎えた。

夢の中でも落ち着いていて流石は国王である。

どうやら国王は女神様と旧知らしい。

「うむ。話が解かるので助かるのう。フミはわらわが召喚したのじ

「や」

「ふむ、何のためにでしょう？本人は還りたいと申しとおりました
が、還せるものなのでしょうか？」

「んゝ還す気はないぞ。フミはイシュライラと幸せに暮らすのじ
や！」

「イシュライラと？」

若き青年魔術師の名を聞き、国王は首をかしげる。

国王が知識として持ち合わせているイシュライラは「年若いが最高
の魔動力を誇る聡明な天才魔術師、だがたまに魔動力構築理論を暴
走させるちよい困ったちゃん」であつた。

【魔動力】とは個々人の体内及び自然に存在する【力】のことであ
り、現代日本で言えば電気のような代物である。

その【力】を自由に利用できる、または自由に利用しようと研究す
る者たちを総じて【魔術師】と呼ぶ。

【魔動力構築理論】とは魔動力をどのように発現するかを法則的に
まとめた知識である。

「うむ、イシュの嫁にするのじゃ。今年の祈念祭でイシュの願い事
が聞こえたモンじゃからな。なに、要約すると『可愛いお嫁さんと
可愛い子供が欲しいです！』だったのじゃが、アレは潜在魔動力が
強すぎて世界中探しては見たのだが、この世界の女ではどうも耐え
られんようだな。アレの子を成すには女が魔動力干渉度が同じ程度
があるいは無かだったもんじゃから。魔法がない世界から魔動力の
無い娘子むすめこを連れてくるしかなかったのじゃ……うん、面倒じゃから
干渉度の説明は省くぞ、お前なら解かるであらう？」

そんな話イシユライラ自身とは全然していなかったが、どうやらあの青年宮廷魔術師殿は本当にかなりのお力を持っているようである。

「なるほど。異世界人いえ、フミには魔動力が無いのですか、そのような人間も居るのですね。まあ膳は急げと言いますし、イシユライラとフミの結婚式を明日にでもしてしまいますか」

「いやはやお前と喋ると台詞が少なくてすむのうゝまあフミにはヨロシク言いくるめておくれ」

「それにしても少し年齢が離れているような気がしますか？」

「以外に下世話じゃな、アンディ。平気じゃ、イシユはフミに見事一目惚れしおったぞ、押し倒すのも時間の問題じゃな！というか明日結婚式じゃからもう明日の夜には押し倒されとるな！わらわから結婚祝いに赤ちゃんをくれてやるわ！フハハハハ！」

「押し倒……いえ、そうですか……フミは……」

「うむ、若くて賢くてそれなりに顔もイイ、ちよいと自分の世界に入り込みやすい夫を持って、フミは幸せ者じゃゝ」

（あれ？幸せか、それ……？）とは流石に国王であるアンドレアも神様には言えなかった。

こうして下世話ながらも（というか下品）フミの異世界トリップは本人が寝ている間にいろいろ進展した。

~~~~~ 本日の攻略セオリー ~~~~~

異世界トリップセオリー其の七：「異世界人と結婚する羽目になる」  
見事クリア。

異世界トリップセオリー其の八：「本人の知らない間に謀略の当事者になる」見事クリア。

## 第2話 女神、告げる（後書き）

下品なお話になってごめんなさい、フミさん（主人公に謝るんかい）

ということと第2話女神サマ大暴走するの巻。

思いのほか女神様にはハツチャケていただきました。

こんな神様居たら信仰するしかない……。

とりあえずウィリアム氏のピー音規制トークはもっと入れたかったんだけど

想像力が貧弱なので思いつきませんでした。

起承転結の全4話終了を目指してがんばります。

年齢の間違いなおしたぞつ。と。

### 第3話 王宮、忙殺す

日中、地球で言えば午前10時頃、異世界時間：巳刻。みのこく

フミが落ちてきた異世界のとある一国「デイルトア王国」の季節は春。

日差しは柔らかく、人も生き物も動きは滑らかで、緑が活き活きと伸び育とうとしている。

フミ様の世界の常識は知らないがウチでは今日みたいな天気は婚儀式日和だ、と慌しく準備をするも侍女たちはお喋りを欠かさない。

夢で女神から異世界からの召喚者と歳若き魔術師についての重要な宣告を受けたというアンドレア国王の勅命により、本日の予算編成等の予定ほぼ全てをキャンセルし、主に王族及び公爵級が結婚の儀式のために使用する城内の聖堂・フミが召喚された場所でもある・内では、侍女、近衛兵及び魔術師たちが婚儀式のためだけに忙しそうに働いていた。

国王は当の魔術師イシュライラの勤める魔術庁トップである魔術庁長エラム・デイルグに宣告についての子細を述べてから一息ついて洩らした。

「ペクテーヌ様の慈悲がアレに降ってくるとは思わなかったな、アレの魔動力が…言つては悪いが…女神が哀れむほどの強さだということがよく分かった」

国王の夢の中で、女神ペクテーヌは祈念祭にちなみ誰かの願いを

叶えようと世界中の祈りを聞いた瞬間、自分の魔動力が強すぎて子供を望めないというあの子の動揺がとても心に痛かったの、と眼を伏せて言っていたのだ。

文章に纏めると随分と感傷的な女神のようだが、国王に挨拶をする時など主に前半は完全にはちゃけモードだった。（第2話参照）後半は彼の魔動力に対する研究熱意と元来の力及び適性では確かに彼の血を受け継ぐ子供は望めまいとしんみりと語ってもいたのだが、第2話ではそんな感傷的なシーンは面倒なのでそこはかたく省略されている（オイツ！）

それと、イシュライラ自身が夢の中でさらに別世界へいわるゆる妄想ワールドへ旅立ってしまったので、話を聞いてくれない当事者に拘ねた女神が国王に目を付け、前半明るく、後半しんみりと語っていただけに過ぎない。

要は国王様ともあるうお方が半分以上とばっちりを受けているだけなのだが、ソコの部分はイシュライラと女神のやり取りを知らないので問題は無い。

女神の熱い思いをガンガンと聞かされたお陰で若き魔術師に同情をよせつつ、宮廷魔術師の統括者、魔術庁長相手に女神の宣託を忠実に遂行するため、儀式に使う用具を淡々と点検しながら話すのであった。

「そうですね。力が強すぎて子が成せぬとは……自身を研究したイシュ本人が一番衝撃を受けておりましたからな。フミのことを気にしておるのは昨日の時点ではよく判りませんでした、どちらもまだ寝かせております。しかし、『異世界人帰還方法の探索』命令の方は如何なさるおつもりですかな？」

「ふむ、それだが、緊急命令から外すが続けてくれ。夫婦喧嘩で実家に還ると言われたときに還れんのでは困るだろう？」

女神に夢の中であつたにもかかわらずそのテンションに完敗し、還す気はないと言われたものの、帰還方法自体があるのかどうかを聞くのをすっかり忘れていた国王。

そのようなやり取りがあつたことをおくびにも出さず、庁長と前日出した命令についてをやり取りする。

「陛下、小粋な冗談なのか本気なのか分かりません」

「一応冗談のつもりだ。……続けていれば何かしら別の発見があるかもしれندろうし。ペクテー又様にも今度また夢で会えたら聞いておく……」

畏まりました、と言い終えるや否やそくさと庁長が逃げるように魔術庁の重役に話しかけたことで、国王の小粋な冗談は見事通じず、何となく気まずい会話が終了するのであつた。

一方、儀式会場設営を行っている近衛兵及び侍女たちはあくせくと働いていた。

誰もがこの儀式についての興奮、好奇心を抑えられない。

なんせ、国王の勅命による行事なのである、しかも婚儀式（＝結婚式）。

元々勅命と言われるような命令などそんなにあるものではない。

地球であろうと、この我々から見た異世界ディリトア王国であろうと、例え戦時中であっても国家の行事・政務とはお偉方がテーブルを囲んであーだのこーだの言うようなモノで動くである。

普通はたった一人の言動で即座には決まらない。

例えソレの発信源が国王であっても、だ。

この度の勅命に関しては後付で重役達の承認を得ている。

それだけ女神様信仰が厚いのだろう。

一方、侍女たちは仕立て屋を囲み、花嫁衣装についてを熱心に確認し合う。

「それで、陛下曰くフミ様は胸部ほどの長さの黒髪でして、肌色はどちらかと言うと黄色味を帯びているそうですわ！お年は27と言うことでしたが真珠のように美しい肌だそうですね！なので真珠をふんだんに使ったお衣装がよろしいかと！」

「えつと黄みがかった真珠のような肌の黒髪のお方ですか……」

こちらの世界でも結婚するのにはやはりウェディングドレス…日本語で言えば婚礼衣装が存在するらしく、城下の仕立て屋オルドー・ヴェリエを呼びつけて、まだ寝ている花嫁のためのドレスを作れという無茶振りをしていた。

「でも全体的に細くて小さいのだそうよ、陛下は5尺程度（約150cm）だろうと仰っていましたわ。あとお顔立ちは可愛らしいという形容がぴったりだと」

おおよその身長は陛下から聞いたということだが、肩幅、胸囲及び腰周りの不知など、あまりの無茶振りに仕立て屋オルドー氏は本気で匙（というか針）を投げそうになった。

余談だが、フミの身長は155cmで体重は秘密、胸囲80cm

のウエスト60cm、ヒップ85cmでCカップの日本人の平均よりちよい痩せ気味の+アレ、私って安産型？というような体型であった。

ちなみに彼女の口癖は身長とバストサイズがあと5cm欲しかったのである。

どうやら彼女は巨乳に憧れているらしい。

とりあえず聞いた情報を元にオルドーは頭をフル回転させて考えた。

多少の誤差があっても見栄えする衣装かつ、黒髪に似合い、肌の美しさが損なわれないようにする……

前か後ろ開き…着付け易さと造形・作業時間から考えて、ある程度現場で補正しやすいように作るしかない。

そうすると確か何処かの民族衣装で見たことがあった。

我らがデイルトア王国から南方に位置するサリエ島国の多数民族サリエの衣装だ。

横長の一枚布で下腹部を覆い、念のため2回巻きしてから右か左肩に布地を持っていき、胸元を覆うように隠す形をとる……。

(つまり地球で言うところのインドの民族衣装サリーである。)

それでは色は、無難に白か黒、黄味がかっているというなら赤や橙、金も似合うのではないだろうか？

そこでオルドーはっと気づく。

侍女たちは自分の同性である花嫁の衣装ばかりに気なっているから気にも留めていないのだが、男性側の衣装も用意しなければならぬ。

「失礼、衣装の色を決めるのに確認したいのだが、どなたか花婿の方の髪色はわかりますかな？」

一人の若い、年の頃は20歳前だろうかの侍女が答える。

「青ですわ、腰までの青い御髪に灰青色の瞳の。花婿はイシュライ様ですわ」

聞いてもいないのに瞳の色まで教えてくれた。

「……ああ、魔術師の……彼の寸法をわかる方はいるかな？」

そう問うと先ほどの侍女が顔を赤らめてイシュライのサイズを答えた。

どうやら答えてくれた彼女はイシュライのファンらしく、仕事は一応してはいるもののなんだか落ち着かないようであった。

生憎とオルドーは若い魔術師の容貌は知らなかったのだが、聞き及んだ情報を元に、ならば青、緑、金、白黒で纏め上げるかと決めた。衣装の納期限は6刻（約6時間）後の申刻（ゆめしんく）地球で言えば午後4時頃まで。

善は急げ、と彼はそのような色合いの生地があるったハズだと自身の記憶を確認し、婚礼衣装を製作するために駆け込み自身の店へと帰っていった。

彼は近くにいた位の高そうな魔術師に転送魔法を頼むことを忘れなかった、タダ勿論無料で。

日暮れも近い、地球で言えば午後4時頃、異世界時間：申刻。やるのしんく

仕立て屋の婚礼衣装の納期限に、フミは按摩マッサージを受けていた。

未刻（みく）午後2時頃（ころ）に起床したフミは侍女に傳かれ、あれよあれよと言う間に洗濯もとい風呂に入れられ、全身洗淨されると、まったりと豪勢ではあるが胃にもたれることは無い、野菜とハムらしきもののサンドウィッチ（一言で言うとは異文化すぎて原材料分かります）という朝食兼昼食を食べ終えてから、儀式でさらに肩がこるからと言われ、体を解きほぐすためにと按摩を受けていた。

按摩を受け、ダラーンとしている時に国王が現れる。

按摩師及び侍女達がいつせいに頭を下げた。

フミはどうしようか一瞬考え込むも国民じゃないからいいや、と仰向けでいた体勢を寝台（トス）に両手を付いてから起き上がり、目礼するという動作だけにとどまった。

「女神様からのお告げがあった。2刻後にフミの初仕事だ」

召喚直後の自己紹介時に仕事が欲しいと言ったフミに対し、国王は初仕事という言い回しで婚儀式の話を持ってきたようであった。

フミは2刻が何時間なのかがいまいち分からなかったが、コクと言う響きから4時間くらいかなと勝手に理解した（解説はしていないが間違いである）。

「へえ……女神様……現実的に居るんだ？」

「その眼は疑っているな？私の戴冠式の時にも夢の中に現れてくださったのだぞ。もっともあの時は祝福の言葉だけだったが」

「で、どんなお告げを？」

「まずは婚儀式、それからあとは何が必要かは二人で判断すればいい

い」

「はあ…… コンギシキ…… 婚儀？…… いや、献儀式か…… ハイハイ」

フミは自分が何かに捧げられるイメージを抱き、脳内でコンを献と漢字変換した。

コンギ・シキではなく、コン・ギシキと発音されたのも一因かもしれない。

「ん？何だ…… 驚かないのか？」

「え？ええ、まあ」

何らかの意図、まあ大いなる意思みたいな感じのがあつて。私の知らないこんな世界に私自身が呼ばれたんでしょし、というか絶対【ソノ為】に私自身が呼ばれたというのがこういう類たぐいの要かなめでしょうから…… とフミが覚悟を決めたように言った。

彼女は正直こんな展開ならばなんかマンガや小説のように死ぬことはないんじゃないかな…… なんて考えていたりするのだ。

「理解の早い。相性は良さそうだ」

と思つたら大間違い。

見事勘違いをしているがスムーズに話が進むため、二人は勘違いしたまま話を進めていく。

これぞ異世界マジックもとい、トリップセオリー其の九である。

「こんな私で良いんですかね？…… もっと綺麗な人とか可愛い人とかがよかつたんじゃない？」

「……そんな卑下するような顔でもないだろう。まあ確かに私の妻ほどではないが。……いや、ノロケではないぞ。相手はお前を一目見て気に入ったそうだ」

「ノロケ以外の何モノでないじゃないですか……気に入られてどうもありがとうございます」

へえ、気に入ったんだ？ってかどこで見られたんだろう、いや、顔じゃなくて魔力的なものが気に入ったのかもしれない。私って無尽蔵の魔力とかがあるのかな？と勘違いフミさんの妄想は続く。

「ありがとこの意味が分からなかったが……、手続きは簡単だ。長ったらしい祝詞のりとが終わったら相手と口付けして書類に署名する。署名はフミの母国語、二ホン……だったか？二ホン語で構わない。以上だ。何か確認しておくことはあるか？」

「あー……（生贄きむすめは）生娘じゃないと駄目だ、とか言いませんよね？処女のことですよ、処女」

ココはセオリーとして普通女子高生位の若い娘で処女属性必須じゃないかなと思って言ってみた。

女子高生レベルの若さは気に入ったと聞いたので諦めた。

大体アジア人若く見えるし、きっと異世界補正付いて女子高生＋10歳くらい歳食ってるけど、許容範囲内なんだろうと勝手に解釈しておいた。

処女性はこのいう生贄には必須スキルだと勝手に思っているのだ。男性コミック誌等の媒体に影響されすぎかもしれない。

フミは自慢じゃないが彼氏くらいいたことあったりするのだ、今は

絶賛フリーだが。

別れた理由はデートするのが面倒臭いというフミの自分勝手さによる。マイペース

フミは基本的に集団行動が嫌いな性分であった。

「……何も問題ない……ハズだ」

関係ない、ときっぱり言い切りたいが、イシユライラや女神様の本心など分ならず、曖昧な表現で終わるしかない国王であった。

確かにココ、ディリトア王国では、性にふしだらな者は男女及び貴族平民問わず敬遠されるが、ニホンとやら異世界ではむしろ純潔だけを伴侶に求めるのか、なんと厳しい世界なのか、と眼から鱗な国王様であった。

「じゃあ、無いです」

チューするんかい……

何の生贄になるのか聞くのも怖いしなあ……

鱗とか気になるだろうし、ドラゴン系はちよつとなあ……。

毛むくじやらかどうかくらいは聞けばよかったかなあ……

もっふもふだったらまあいいけど、白虎とか九尾の狐とか……

と自分の相手とやらの容姿を可愛い系（ただしもっふもふ）で勝手に都合よく想像するフミであった。

ちなみにフミ的【毛むくじやら】と【もっふもふ】の違いは、見た目がごつついか、可愛いか、らしい。

異世界トリップセオリー其の九：「勝手な解釈をして勘違いをする」

見事クリア。

異世界トリップセオリー其の十：「自分が卑下するよりは容姿を褒められる」見事クリア。

### 第3話 王宮、忙殺す（後書き）

書き殴った第3話。

勘違い編ともいう。

あと1話で完結予定。

むしろ第1章完結とかにしたい気がします。

## 第4話 妻、解す（前書き）

一応これが最終話です。

## 第4話 妻、解す

夕刻、地球で言えば午後6時頃、異世界時間：酉刻。ユウシク

フミが初めて見た異世界となった召喚された場所、聖堂で婚儀式は厳かに執り行われている。

アンドレア国王に言われた長つたらしい祝詞の一節が真面目に聞いていたフミの眠気を誘う。

だが、フミはこの儀式の主役だ。ついっつかり眠くて寝ちゃいました、えへ。などとてもでもない。眠ってしまったてはいけない。寝てしまえば恐らく最期と言う名の永眠だ。フミは何か別のコトを考えることにした。

そう、忘れてはならない。自分は生贄だ。生贄が寝こけてたら神様モドキは怒るだろう。最悪殺されるかもしれない。

フミはチャンスは作るものだわと自分が捧げられる神様から『逃げる』もしくは『懐柔する』にはどうしたらいいのかと還るために頭を捻ってみることにした。

——しかし、2刻つてもしかして2時間くらいだったのか。やっぱり異世界わからんわあ。そして何の神様の生贄なんだろう？ペクテー又様じゃないことは確かだと思うけど。あーなんかやつぱり聞いたけばよかった。何かの方法で神様のご機嫌を取る↓神様のご機嫌なときに還りたいという↓神様が了承する↓神様に元の世界に還してもらうまたは宮廷魔術師に還してもらう↓完璧っていうプランしか思いつかないなあ……小説とかマンガってどうだったっけ？な

んか還らないで現地人と結婚してとか、恋人作って幸せに暮らしました、ハッピーエンド。ばっかりかも……うあ……イケメンならまだしもブサ神だったらどうしよう。殴っていいかな、いいよね、うん殴ろう。いや、駄目だろ、死ぬって自分。あ、神様の願いを叶える系かなあ？いや、神様だから自分で叶えろや、そんなの聞いたことないわ……そういえば隣で腕組んでるこの可愛<sup>かわいこ</sup>子ちゃんは何だろう……あぁっ、護衛のイケメンさん……英国の王子様と同じ名前ってなんかウケるwアンドレア国王もモナコのイケメン王子様と同じ名前だからすぐ覚えられたもんね！で、護衛のウィリアムさんが本日は宮廷魔術師がフミ様の隣に居りますので、とか言ってた気がする……うわぁっ！魔法で逃げないようにされてんのかー！ウギャー！気づかなかった！！何素直に腕組んじゃったのかな、私！いや、だってニコツて爽やかにこの青髪イケメン君が笑うんだもの！！！なにその髪の毛、真っ青じゃないの！どこのマンガのキャラなのよ！って仕方ないじゃない、イケメンに免疫なのよ！ってかこのイケメン君いくつなのよ？ずいぶん若い気がするんだけど？優秀なのか？きつと将来有望株魔術師とかなんだな。でも有望株にこんな生贄の拘束させるって変な気もするなあ、普通こういうのは経験値高そう……見た目の年齢と違うのかも！どうしよう……後で年齢聞いてもいいかな？いいよね、うん、聞こう。ヤダ、私って頭冴えてるわ。自分の魔力が多いとかいう妄想もあながち間違ってるないかも！偉大な私の魔力で突破とかできないかな？いでよ、炎！……恥ずかしいだけだった！ど、どうしよう！？帰還プランAしか思いついてない上に、魔法がある世界で魔術師同行してもう既に生贄は胃袋へコースなんじゃないの？そうだ、このイケメン君を私の魅力でロメロメ……じゃなかったメロメロにして逃亡の片棒担がせて……うん、そんな容姿じゃないのはわかってるけどね！召喚されたとき誰も見惚れてなかったし！……ううう、だんだん怖くなってきた

「それでは新郎・新婦は誓いの署名を」

「はい」

「（あつ、なんか言われた！）……はい……（声裏返っちゃった……恥かしすぎる……）」

なんだか隣の魔術師様に羽ペンのようなものを渡された。ようなものというか羽ペンだった。

恐る恐る顔を合わせるとにこりと柔らかく微笑んでくれた。イケメンの微笑みは癒される……じゃなくて、目線と仕草からさあこれで書くんだよと言うことらしい、まあ、当たり前のことだが。

——しかし生贄に署名させるって何？しかも文章やつぱり読めないし。あれが最終的に食べられても文句はいわねえぜ！ってやつか！チクショー！だが、断る！……断固こ、……とわれないよあ……みんな睨んでるよあ……あ、せめてもの抵抗に偽の署名しちやる。大体、歩美をフミと呼ばせるほうが違和感じゃつーの。齋藤富美にでもしておくか、どうせ漢字読めないだろうしっ！——

ちなみに参列者は睨んでいるのではなく真剣な眼差しを二人に送っているだけである。

結婚式にへらっへらするのは恥ずかしい幼少時などの映像VTRを流されたときくらいであろう。

だが、新婦フミは結婚式と気づいていないので仕方がない。

偽の署名を使い慣れぬ羽ペンの為かたどどしい筆跡で書き終えたフミは、羽ペンを受け取るように待ち構えていた左隣の魔術師に恐る恐る返し、書面から正面の神父とゆるりと眼を合わせる。

書き終わったことを了解したらしい神父が次の台詞を口にした。

「最後に新郎・新婦は誓いの口付けを」

ス、と滑るようにイシュライラの右手がフミの左頬に添えられる。左手は一瞬戸惑ったもののフミの右腰を支えるように置いた。間違った考えで身体が固まるフミなので微動だにしないため、身長差がある為かスムーズに口付けが出来なかったようで、イシュライラは一瞬思案すると自身の身体を屈めて触れるだけの口付けをした。

——あるえーっ！こいつが神サマだった！拘束係じゃなかったんかい！騙された！私もう食べられちゃうじゃないの！！トリップ2日でバッドエンドなんてやだよー！！——

口づけをされてようやくフミは気づいた。

左隣の魔術師が自分を食べちゃう神サマであるコトを。

そして気づかなかった。

隣の彼が署名してから羽ペンを渡したことで、新郎・新婦と言う神父の台詞に。

かなりのドジっ子（という年齢でもないが）である。

そして、恐怖に耐えられないのか、じわりと涙を浮かべた。

小説だってマンガだってハッピーエンドばかりじゃないって判ってるし、今回も騎士様とか王子様（ただしイケメンに限る）に助けてもらえないのは判ってたけど、コレじゃあんまり短すぎやしませんか、と。

だが、人は恐怖のとき、笑みを浮かべるといふ。

イシュライラには、口角の少しばかり上がった微笑と恐怖のために小刻みに揺れる身体とうつすらと涙を浮かべた瞳というオプシヨンが付加されたフミに見えている。かなり盛大に誤解していた。

—— 27歳って嘘なんじゃないですか？！可愛いです、フミさん！！！緊張していますね！！！僕もしています！！！でももう終わりですから！！！！あとはウチに帰って新婚旅行先を決め……初夜です！！！初夜！！！ショーヤーツ！！！！——

彼の妻となった女性に対する思いやり（と妄想含む）と言う眼力は当の本人にはまったく通じていなかった。

「これにて婚儀式は終了です。お二人ともお幸せになれるよう時には努力もいたしましょう。あなた方は特に女神ペクテー又様が見守ってくださいますでしょう」

神父が言い終えるや否や、式場にバタツッと大きな音が響いた。新婦、フミが気絶し倒れたのだった。

周囲は騒然とした。

そんな中、国王は静かに言った。

「フミからすれば誰も身内のいない式だったのだ。いままでの緊張が一気に解けたのであろう、すぐに帰って休ませてやれ」

…… 国王もフミの極限状態の理由をいまいち判っていないかった。

夜、地球で言えば午後8時頃、異世界時間：戌刻<sup>いぬのひく</sup>。

フミは質の良いベッドと調度品に囲まれて目覚めた。どうにも寝起きのせいか、頭がすっきりしない。

とりあえずまだ自分は食べられていないと言うことだけ判った。

傍には自分を心配そうに見つめる男がいた。儀式のとき隣にいた

魔術師もとい、神様だ。

「…んー？すぐには食べないのかな？」

寝ぼけた頭にはコレが精一杯だった。

「……え、すぐ食べるっ？！そ、そんな、寝ている女性を襲うなんてしませんよ、僕！」

というか出来ない。魔術に貢献すべく生まれてきて尚且つ育ちましたというような華麗な経歴である彼に女性経験は皆無。女性に免疫もなく、実際は食べる〃性交すると一応フミとのやり取りの中では正確に変換しているただのムツリスケベ、ただしイケメン。要はやり方いまいちわかんねえ……のである。アイタタタッ。

「……僕っ子？……で、1000歳超えてるとかなの？」

僕っ子は女の子に使用するものの気がするがそこはスルー、あくまで彼女は寝起きのボケボケ状態である。

「え、1000歳？？？僕は17歳ですけど……？」

「え、若いねえ……こんなオバちゃんが生贄でゴメンねえ……で、キミは何の神様なのかな？青い髪が綺麗だから水系の……竜神様とかかなあ？水神様とかも似合いそうだねえ……ペクテーヌ様は女神だっというし、その彼氏さん？」

「い、生贄だなんてとんでもないっ！あなたは僕の救世主です！……それと僕は人間です……」

なんだか、とんでもない誤解をされているとイシュライラは気づいた。

「え、人間なの？……人間なのに人間食べるの？」

救世主とまで言われたのに気づかない彼女はかなり空気読めない才能がある。

「え？食べませんよ？？」

「じゃあ献儀式って何？実はキミは運搬役とかなの？つかこのベツドは何？と言うかココは何処？」

やっぱりなんか変な誤解をしてる……イシュライラは質問に対し、丁寧に回答することにした。

「婚儀式は婚儀式ですけど？僕は今日からあなたの夫で、ココが僕たちの自宅ですが？……陛下から何も聞いてませんでしたか？えーとべ、…ベツドとは何でしょう？」

「ベツドはえー……日本語で布団……違うな、……寝台のことだよ？……へえ、私の夫なんだ……夫ッ！？旦那さんってこと？？」

「はい……幸せになりましたよう、フミさん！寝台はモチロン僕達が寝るためですよ！いやあ元々大きい寝台が好きで。決してすぐ準備したとかではないんですよ！？僕も今日の朝知ったばかりですし！……」

実は女神のお告げがあって眼を覚ましてから速攻で二人用寝台ダブルベッドを買いに走ったなどと言わない。

開店前の時間だったから店が開いてなかったの、自分の魔法で二人が夜に心地よく過ごせるようにと言う名の誠心誠意と下心を込めて造ったなんてもつと言わない。

イシュライラ氏曰く、だって新婚さんは一緒に寝るって決まってるから！とのことらしい。

「え、ハイ、ありがとう？か、勘違いしてた……もしかして婚儀式か……結婚式ね……結婚式……フーフフ、フー……いやいやいやいやちよつとまで、キミ１７歳とか言ったよね？１７歳とは結婚出来んでしょっ！？」

新婦は、夫「結婚した」結婚式やった「婚儀式だったのか、という図式でもってようやく現状を理解したらしい。

「１７歳でも出来ますよ？」

「え、この国何歳から結婚できんの？」

ああ、異世界だった。日本と法律違うんだったか、と気付いた。

「男女ともに１６歳です」

美青年にニコリと微笑まれ、フミは郷に入っては郷に従えと言う諺を身をもって経験せざるを得なかった。

が、ソレとこれとは別である。イキナリ結婚とかこの乙女の妄想マンガまたは小説の世界だ、と。とりあえず自分より相手を思いやってみた。

「……人生早まっちゃいかんよ、早まっちゃ。キミみたいな若い子は遊んで遊んで遊び飽きたら結婚すればいいじゃない」

「えっと……僕、勉強というか研究が趣味みたいなもので……仕事と趣味を兼ね備えたのが間違いだったのか、流石に研究だけの生活には飽きたような……衝撃が激しかったというか……」

衝撃とはこの世界に自分と結婚して自分の子供を成すことができる女性の存在がないということである。

無論フミはそんなこと露も知らない。

「仕事と趣味を兼ね備えたって……上手く生きてるねえ。私も趣味を仕事にしたかったけど才能なかったんだよねえ……」

なんかコイツ結婚に前向きだな……とフミは思った。よっぽど基地外<sup>レ</sup>なのかな、とも思った。ただ、話していて全くそいう感じではないので判断に困っていた。一目惚れされたとは全く気付いていないのである。

「どんなご趣味なんですか？」

「んーとね一番は旅行が好き。あとお菓子作るのも好き、読書も好き、いっぱい好きなのあるのー!」

旅行好きならツアコンとか客室乗務員とかだけど、旅行会社なんて軽く面接で落ちたさ、とフミは自棄気味で話し続けた。彼女の悪いところは勝手に自己解釈をすることである。

「わあ多趣味なんですね、凄いなあ。フミさんの作ったお菓子食べたいなあ」

素直に賞賛しつつ、イシユライラは妻の技能と弱点スキル  
ウィークポイントと言う名の大多

数の日本人の欠点を分析をしていた。結論としてはとりあえず褒めとけばいいかも。安直であるが、褒められるということが少ない日本社会で生きてきたフミはくすぐったそうに返答をしてくれた、食べたいと言われたのが嬉しかったらしい。

「ん……甘いモノ好きなの？」

「ハイッ！」

とびっきりの笑顔で答えるとフミは赤くなって、ココの生活に慣れたら作るよ、と返したのだった。

兎にも角にも初夜は自分達がどんな関係かの整理で終わった。

そして、その日の夜が初夜であるということに気づきもしなかったフミは、ようやく次の日の夜になってから昨日が初夜だったことに気づいた。その夜に、ちなみに私処女じゃないからゴメンねえと呟きつつ、イシュライラを押し倒した。ちなみに彼女が押し倒した理由はこんなイケメンとするチャンス滅多にないもの！である。意外に肉食系女子であった。それと家庭内ではごく自然に妻であるフミが主導権を握った瞬間でもあった。

く\*く\*く エピローグ く\*く\*く

異世界時間3カ月後。

フミが暮らしていくうちに判ったことは、一週間と一ヶ月がやた

ら長いことだった。

この世界は12が基礎の数字らしくて、一日は12の2倍で24刻、つまり24時間ぐらいなんだが、一週間は12日あるし、一ヶ月が12週あって、一年は地球と同じく12ヶ月、一年11728日もあるのだ。ちなみにこのディリトア王国は四季もある。

つまり、異世界の1年は地球時間で考えると5年分くらいあるのだ。夫であるイシユライは17歳って言うてたけど、それって軽く地球人換算80歳くらいじゃないのか？と気付いても後の祭りなのである。

ただし、彼本人の見た目から判るように、その分地球人とは成長と老化のスピードも遅いようである。

はて、それでは自分はどうなるんだろうか？そもそもココに来て3ヶ月ほど経ってしまったし、つまりは地球時間1年以上経ってる。

「あれ？でもコレってハッピーエンドなオチじゃない、私？……そして生理全くこなくなね？」

歳の離れた（しかも年下なのか年上なのか良くわからない）イケメンの将来有望な、現在は宮廷魔術師として城で勤めを果たしているであろう夫を持った異世界から来た新妻は、ある日洗濯物を干しながら呟いた。

確かにトリップ初日や二日目は不安だったが、生活が安定してきた今、地球時間換算では一年も経ったのだ、生理が来ないというのはおかしすぎる。詰まるところどうやら身体は異世界仕様に変更されているらしい。

「……妊娠検査薬とかあるのかな、この世界？」

今更なんだけど、『結婚』おめでとう。

『第二の女神様の落し人』の誕生おめでとう。

そして最後に、偽署名は結局何のフラグも立ちませんでした。  
だって……この国漢字文化じゃないんだもんっ！

異世界トリップセオリー其の十壱：「異世界人と結婚する」見事クリア。

異世界トリップセオリー其の十弍（？）：「異世界人との子供を産む」もうすぐクリア。

#### 第4話 妻、解す（後書き）

読了、お疲れ様でした&ありがとうございました。

女神ペクテーヌ様は説明が足りなさ杉、フォローしなさ杉、ですね  
っ。

イイのよ、神様だもの、勝手なの。

次回作も同じ世界に日本人をトリップさせますのでよろしく願  
いします。

番外編も適当に作りますのでリクエストがあつたら言ってください  
ませ。

可能な限り答えたいと思います。

番外編 郷に入っては郷に従えば問題ないってマジで。ソレがたとえ異世界であ

ども、異世界トリップいたしました意外に肉食系女子の斉藤歩サイトウ美ミです。

リクエストいただきましたので、初夜のお話をしたいと思います。

初夜は、地味に会話だけで終わりました。

何せ私には何の情報もありませんからね。

まず、欠かせない自己紹介ですね。

名前と年齢と仕事と趣味とかかな。

旦那様は17歳とか日本じゃありえないので、ちょっと興奮してしまいました。

若いっていいね、肌のつや……化粧品も一緒に召喚して欲しかった。私のことは気軽にフミ様と御呼び♪と言ったら軽く引かれました。彼は冗談が通じないタイプらしいです……メンドクサ……。

あとは異世界であるディリトア王国の情勢とか聞いときました。

あのアンドレア国王って有能なのかい？とか（超失礼）。

王様は愛妻家の平和主義、有能です！だそうです。

愛妻家、有名なんだ……確かにちよつと妻自慢してたな。

あと、国家間の関係や、簡単な政治体制とかを聞きました、あの署名させられた書類は婚姻届だったそうで、私が漢字で書いたのを見て、漢字を使う国があると教えてくれました。

是非行きたいので新婚旅行先にしてもらったよ。

偽署名したけど……コレは墓場まで持っていく秘密にしよう。

うん、この国漢字使わないらしいし。  
今から文字覚えるのか……まあ、頑張るか。

女神ペクテーヌ様とか宗教観。

女神様に祈りを捧げているときに私が落下したってことなので聞いてみたの。

その日の夜にイシュは夢の中でハイテンションな女神様に逢ったそうです……。

でも私との結婚のことが嬉しくて考え事始めたら（嬉しかったんだ？こつちが嬉しいなあ。）国王様のところに行くって言われて、女神様からのマシンガンお告げは終わったらしいです。

私の世界で私がどういう状況になっているかはまーったく言っていなかったみたい。

ディリトア王国の国教は愛の女神ペクテーヌのみの信仰対象でー神教らしいですが、信仰自体は個人の自由だそうな。

戦女神チヨジエ様という神様も人気あるらしいです、特に男性に。つてかチヨジエ様は絶世の美女らしいです、女神様たち見たいな。

中二病なので自分が最強モノかも！？と思つて、私にも魔法使えるか聞いたたら、フミさんには魔動力が無いので魔法は使えないですねと言われました。

無いって……0ですよ、ゼロ……地味にシヨックですが、何か？魔動力とか魔法関連の説明も聞いた結果、予め魔動力を込めた道具とかは使えるそうです。

いでよっ、わが炎ーうっうっ。

そんな感じでだらだらと会話して、女子のパジャマパーティーかってくらいさっぱりした雰囲気でお喋りしたので、二人とも同じベツドで気づいたら寝ておりましたわ

マンガに出てくるようなイケメンと同衾していたのにグースカ寝ちやった私の馬鹿馬鹿っ！

写メとか撮りたかった、自分のバカバカッ！

地球からの持ち物パジャマしかないけど……。

あ、そういえばベッドは、あざといタイミングで元から二人用ですよ、僕は寝相が悪いのでって彼は言っていました、確実に婚儀式当日中に用意したんだと思います。

だって綺麗過ぎたんだ……未使用でしたね、アレは。

匂いとかもないし、寝相悪くなかったし。

10も歳の離れたお姉さんを騙そうたってそうはいかんぞ。

この国は成人は15歳、大体働き始めるもこのくらいからでも結婚は16歳からなんだって。

中国みたい（成人18歳、結婚22歳から 一部除く）です。

彼は宮廷魔術師という仕事<sup>ジョブ</sup>を15歳からやっているらしく、お金にはこれからおそらく困りませんので、フミさんは働きたくなければ働かなくても構いません、家事もギルドに依頼すればいいですし、やりたくないことは何もしなくていいです。と言われました。

ギルドはハローワーク+コンビ二+αらしくて、世界統一でギルドと言う発音だそう。

やりたくなかったら家事までしなくていいってどんな駄目人間を育てようとしているの、この子……むしろ、何なの、この世界……。

よくよく聞いたら、手荒れが無いし、日焼けもしてないから、貴族みたいな身分の高い人なのだと思われてました。

フフフ、昔から手は綺麗なんだ、自慢なんだ……あと事務仕事だし、家事は適当だし。

仕事……ああ、やっぱり地球での私はどうなってるんだろう……？  
ってか普通の主人公ってまずはじめに地球の自身の状況考えるだろ  
うなあ……。

お父さん、お母さん……そしてシスコン気味の弟よ……達者でな！

あ、弟いるんですよ。出てきもしない設定でしたけど。  
弟はイケメンじゃないからじゃれてきても叩きますよ、ええ。  
イシュは可愛いので許す、むしろ私から構い倒す。

新婚2日目の朝、イシュ君のお仕事がお休みなのだそうで、家の中でまったりと夜話したことの復習と、生活習慣とか暦とか教えてもらいました。

「今日は建国暦1401年6月125日です。あ、一年が1/728日なんです」だそうな。

え、私6月124日に結婚したんだあ……ジューンブライドじゃない……って何だよ……125日とか1/728日って。

えー1/728日割る365日は約4.7……地球の約5倍じゃん……orz

長いよ、長すぎるよ、一年……。

旦那様17歳でも地球で言うところと80歳分生きてるよ……。

やたら落ち着いてんなあとは思ってたけど。

イシュじいちゃ……まあいいや、イケメンだし。

人間見た目が10割だよ。

ってかデイトアは数え年で年齢計算とのものでイシュ君は実質16歳でした。

あとは新婚旅行はあっても結婚指輪の概念がないそうです。  
ダイヤモンドは永遠の輝きとか言って買わせたけどね。

そしてこの国選択的夫婦別姓だそうな……フミ・キールンでもフミ・サイトウでもいいらしい。

イシュライラ・サイトウもありだそうな。

おっと、キールンはイシュライラ君の父方の名字だぞ。

キールン家は大きい商家らしい。

やっぱり宮廷魔法使いとかって貴族とかのお金持ちの道楽系よね！

孤児が才能を買われてつてのも捨てがたいパターンだけだな。

つつか婚儀式にイシュの両親と兄弟いたんだってさ！

イキナリ駄目嫁じゃん、私！挨拶なんてしてねーし！！！！

ん？嫁つてコトでいいよな？

おつと話題がそれだ。

身分登録庁つてとこで選択手続きしないといけないそうだが……その前に私の身分、何？

異世界出身・平民・♀とかでいいのかしら？

イシュ君が上司経由で国王に確認してくれるそうな。

まあ、個人的には外国人と結婚したようなもんだから、日本と同じ感覚でいい感じ、キールンでもサイトウでも。

ずっとこの国に住むならサイトウのまましていると、例の漢字を使っている元ブエルノ帝国民だと思われるだろうってさ。

別に帝国民と思われて不都合も無いけど、色々他国絡んできて面倒なのでキールンにしちゃおつと、人生ストレート勝負よね。

でもどうせなら日本の住民票とか戸籍でキールン歩美が見たかったなあ。

というか自分で作りたかったわあ。

あ、私つてば戸籍課勤務だったのです。

そんな感じで新婚二日目はまったり一日が過ぎていきました。

ちなみにご両親はお仕事でしばらく逢えないそうな。

あああ……確実にダメ嫁フラグ立った……？

弟（14歳）さんはそのうち紹介していただけるそうです。

美少年なんだろうなあ……（ニヤニヤ）

そして大事な金銭面ですが、私の旦那様の稼ぎハンパネー！

国からの給金（防衛費）で月380金（日本円で約500万円！）

出て、大体それで生活していたらしいですが、そのほかに魔法による特許料があつて軽く国からの給金の10倍は稼げているそうです。

まあ一ヶ月144日兼物価3割増し位っぱいので日本人の感覚からすると手取り月約800万円なんだけどね。

年に換算すると約1億円……家計簿つけるの楽しそうだね。文字を覚えるのにもちょうど良いかな。

一度で良いから金を湯水のごとく使ってみたかったのよね。

私のものは私のもの、夫のものも私のものよね？

で、初夜の翌日に前日が初夜だったことに気付きましたので、私のほうから気付いたので謝りつつ、中年親父系エロエロ病な言葉攻めで襲い掛かりました（笑）

17歳相手は犯罪だ？

大丈夫、結婚したから。

ってか郷に入っては郷に従えよ……フフフ。

何となくDTなんだろうな～と思ったら、案の定でした、ごちそうさまっ！

据え膳食わぬは女の恥ですよ、ええ。

え？女じゃなくって男だって？

女も恥だ！

いいか！

チャンスは逃したら駄目なのだっ！

その機会を置いて他にないかもしれないからチャンスと言うのだ！

わかつ……おっと、つい興奮してしまいました、失礼。

そんな感じで、まず身体をじっくり観察から始めてみたり、鬼か、私は。

魔術師と言うからひよろいのかと思っただらそうでもなかったり……隣に並んだから身長が高いのはわかってたけど……弟の170cmより余裕で頭の位置高かったから、180cm以上あるハズ。

つつか私マツチヨ嫌いなのでこれ以上筋肉つけてくれるなよ、細マツチヨよ。

研究で箆って寝るのを忘れるときもあるから、ある程度の体力をつけてますと必死で説明されてしまい、まあ……顔真つ赤で涙目でした、かわいいコト……。

恥かしいことさせてゴメンよ。

でも普通のマンガとか小説のトリップものって女性側がこんな感じの扱いされるからね！

逆もたまには新鮮でいいよね！読者様が喜ぶだけだけどね！

で、致した後にムードも減ったくれも無く、DTな理由を聞いたら、驚きです。

僕、魔動力ありすぎて相手が僕の力に耐えられなくて死ぬんです、理論上は。と涙ながらに言われました。

ちよつと待てー！ヤツちゃったよ、トリップ4日目で死亡フラグ来たぞーっ！ー！と思いきや、私は魔動力0のせい<sup>はんぱっ</sup>か、力の反撥み<sup>はんぱっ</sup>たいのが起こらないので死なないそうです。

むしろ魔動力を吸収して私も魔法が使えるようになるかも、とな。

絶賛研究中らしい。

びっくりしたー！みんな短気は損気だぜっ！何も無かったからいいけど。

しかしHして魔法使えるようになるってどんなエロゲ？

私も体力付けておこうかな、魔法使いたいし……おおー！単にHしたいからじゃないよ？

しかし魔法奥が深いぜ……そして殊に魔法にはイシユ君は饒舌だぜ。さつきまで泣いてたくせに……泣かせたとも言つかもしれないけどっ！

感動の涙だよ、感動の。

被害者の泣じゃないよ。

あれだもん、喜んでたもん（言えば言うほど性犯罪者っぽいな）。

とりあえず魔法の講義聴いてたら眠くなったので寝ちゃいました。  
ごめんなさい、旦那様。

そんなこんなで異世界にて可愛い旦那様と一緒に過ごしております。

が、最近、私の中年親父系エロエロ病が感染したのか、やたら奴はシたがります。

なんだろう……若いつて良いな（遠い眼）

二回に一回拒否つても良いよな、これ？

ホント体力ないんだよ、私。

あ、魔法使えるようになったかな？

「フミさん、今日はダメですかあ……？」

「イシュ……伏せっ！」

「ギャウンッ！」

見事に私の言霊<sup>ことだま</sup>が旦那様の身体の動きを縛り、見た目と態度が大型犬っぽい旦那様はベッドに叩きつけられました。

マンガで言つと犬夜○のワンコロがカゴメなるお嬢さんにO・S・U・WA・R・I・I！という台詞を言われた場面と同じです。

知らない人は検索して動画でも見てみてください。

まあ、そんなわけで私、新婚生活8日目から魔法使えるようになり  
ました……。

ちなみに今回の魔法のお手伝いしていただいたのは風の精霊さんの  
ようです。

あとどれだけHすれば亀ハメ波が出せるようになるのかなあ……。

どうも私は呪文の詠唱が必要ないようでイシュさんの研究魂が燃えたようです。

その日は別の意味で攻められました。

「で、次はお湯を沸かしましょう！さあ、どうぞっ！」

「ね、寝たい……沸騰しろーで良いんじゃない……？」

寝室から台所に移動した私たち。

テーブルの上に置かれた鍋に入った水はうんともすんとも言いません。

「あと、ちょっと！あとちょっとですから！もっと感情込めて！」

「沸騰しろー……ガンバレー。沸いたら寝るぞー！」

ポコポコと鍋の中ではだんだんと気泡が現れていきます。

お湯が沸きつつあるのです。

頑張れ、私。

寝るために頑張れ、私……ねみい。

「家事で使うにはもっと魔動力が必要ですね。頑張りましょうね、フミさん！」

「う？うん……？」

もっと判りやすくこの鍋の水は沸騰しろって言ったほうがよかったのかな？

（いえ、Hをですよ、奥様。）  
b y 風の精霊

番外編 郷に入っては郷に従えば問題ないってマジで。ソレがたとえ異世界であ

ペクテーヌ「イチヤイチヤしとるのう……」

グオム「……したいのか？」

ペクテーヌ「モチのロンじゃっ！」

グオム「そうか……そういった類は苦手なんだがな……」

ペクテーヌ「わらわが二人分イチヤイチヤするっ！」

グオム「……すまないな……」

チヨジェ「バカツプルの旦那だけ滅びてくれないかな……」 ↑ 蔭で見つめるストーカー

今回の後書きは神様夫婦が登場っ、でもイチヤイチヤしかしてない。そしていきなり誤字修正した。例のセリフはお座り！でした。

間違えて覚えてたようだ。

マツチヨが嫌いなのは私です、ええ。

番外編 王道らしく子供が出来ました！ 全員曲者ですが何か？

side：イシュライラの5年後

皆様、こんにちは、若しくは初めまして。

デイルトア王国宮廷魔術師のイシュライラ・キールン、23歳・既婚（強調！）です。

元日本人、現デイルトア人である妻のフミからは「イシュ」と呼ばれております。

彼女は現在32歳ですが、相変わらず可愛い外見をしています。と言いますか、5年前と変化無いです。

「出産後は6ヶ月で体重元に戻さないと永遠にそのままなのよ！」

彼女はそう主張して風の精霊と共に子供2人をあやし、体重をたった数ヶ月で元に戻してありました……日本の6ヶ月はココでは2ヶ月程度です。

というか体重もつと増えても僕はいいと思いますけど。

5年前、僕たちは神の思し召しで突然の結婚をしました。

あれから5年の今、二人の子供に恵まれました。

長男ヨーゼン（5）と長女レイ（3）です。

元気にすくすくと育っております。

フミさんは気合で産み分けしたと言っていました。が、女の子<sup>レイ</sup>だけよかったです。

だって、何処で如何育て方を間違えたのか息子が僕の言うことを聞きません。

見事なまでにフミさんの言うことしか聞きません。

我が息子ながら誰に似たのか性格が悪いです。

「ヨーゼン、そろそろ寝なよ」

ある日のことです。

娘に絵本を読み聞かせて寝かせてから、僕は絵本を片手に息子の部屋で息子に声を掛けました。

息子も寝かせてから、フミさんとあんなことやこんなことをするためです（、・ω・）キリッ！

「寝ない」

案の定息子には否定の言葉を投げつけられました。

彼は小難しい本を読んでいます。

本のタイトルは『詠唱不要の魔術の可能性について』、著者は僕です。

「あれ、ヨーゼン？ まだ起きてるの？」

まだ明かりが点いている所為か息子が寝たのかをフミさんが確認しに来ました。

「あ、今から寝るところでした。おやすみなさい、お母様」

ヨーゼンはにっこり笑っていそいそと支度を始めます。

ちょうど読み終わったのでしょ？ と皆様お考えでしょう。  
いいえ違います。

彼は急いで紙に何かをメモして読んでいたところに挟み込んでいます。

前回は『父さんのバカ』とフミさんから習った日本語で書かれていましたので、フミさんに泣きついて怒ってもらいました。  
ふ、お父さんはバカじゃないぞ！

日本語もフミさんに習ったので読めるんだぞ！  
フミさんのやれやれしょうがないな〜という視線というか顔が大好きです。

あ、イシュのバカー！ と言う時の顔も大好きです。  
もう完全に話がそれてますが、ようやく息子は寝台に入りました。  
僕におやすみなさいという挨拶は結局ありません。

存在丸無視されてます。  
完全に眠りこけたのを確認して（というか腹が立ったので魔法で眠らせました）メモを調べてみました。  
だってどうせ碌な事書いてないし。

『お母様と結婚するにあたっての障害、1：法律、2：父。王様は無理だとしても宰相になって法改正してお母様と結婚しますから、父さんは早めに存在自体消えてください。』

……うん、宰相になって法改正に取り組んでも実母との結婚は無理だと思っよ？

っていうかなんでこの本読んでたの？ 読んでた意味あるの？ どうせ中身読んで無いでしょ？

確実に僕がこのメモを読むことを分かってやっています。  
地味な嫌がらせに心がズキズキと痛むのでフミさんに慰めてもらうことにします。

まあ、5歳ですらすらと字を書ける天才なところは僕似ですか、そ

うですか。

というかフミさんに抱きつく理由が増えるだけだからね、ありがとう、息子！

そんな息子が嫌いじゃなかったりします。

「フミさん、ヨーゼンは宰相になりたいんだって」

僕は長椅子にゆったりと腰をかけていたフミさんに抱きつきながらさつき分かった息子の将来の夢を聞かせました。

「へえ……なんでまた宰相？」

「コレが理由です」

フミさんにしっかりとメモを手渡しました。

夢は政治家ねえ……あんまり子供らしくないなあ……と呟くフミさん。

確かに僕も子供の頃の将来になりたい職業といえば魔術師でしたからね。

僕の場合、しっかり（宮廷）魔術師になっちゃったけど。

ちなみに宮廷魔術師ってフミさんの日本語によるといわゆる魔術師の中のエリートって奴です。

わあい、僕偉い。

「息子が可愛すぎるって言ってた日本の同僚の気持ちは今ものすごく分かるわ……けどコレはないわ」

フミさんはそう呟き、息子にドン引いていました。

日本ではヨーゼンみたいな子をマザコンと呼ぶそうですね。

将来恋人できるのか心配していました。

フミさんは僕のなんでヨーゼンは独りで寂しく生きればいいと思います（・ω・）キリッ！

「私、ヨーゼンのこと特に可愛がつてる自覚無いんだけどな？  
むしろ着せ替えが楽しい娘<sup>レイ</sup>を構ってる気がするし」

フミさんはうんうんと頭を横に振って考えております。  
そんな仕草が一々可愛いです。

「あとヨーゼンが僕にお休み言ってくれないです」

息子は僕から挨拶しても無視します。

怒っても無視。

悲しんでも無視。

結局直りませんでした。

反抗期ですか、そうですかで最近は怒るのやめてフミさんに告げ口です。

フミさんの前でなら挨拶してきます。

「えー、またあ？ こないだちゃんと怒ったよ？」

ヨーゼンもレイも僕似のやや濃い青い髪と濃灰青の瞳です。

フミさんはやっぱり気合で僕似にしたと言っていました。

気合凄いよ、気合……多分、何かしらの魔法を使っているんだと思います、無意識的に。

というかフミさん僕の顔好みですか？  
言われたこと無いけど。

「変なところ遺伝したかなあ……？」

僕に容姿が似るとフミさん大好き遺伝が濃いということは、その分だとレイも危ない道に入りそうな気もするんだけど。

ちなみにレイは大人し過ぎてたまにいるのかいないのか判らない時があります。

フミさんが嬉々として着せ替えしている時も特に騒ぎません。

ちなみに僕が構うと反応が全くありません。

嫌われているのかすら現段階ではよく分かりません。

レイは泣くのも滅多に無く、たまにオヤツが欲しくなった時だけです。

そして兄であるヨーゼンは妹に見向きもせず実母の追っかけです。妹まで僕似だから興味無し？

ここはフミさん似の妹か弟をこさえてみたらいいのではないでしょうか……。

ということで第三子いつてみようか！

「フミさん……性交の精霊の裏情報聞きたいです？」

昔、性交の精霊がいると知った彼女はどんな容姿なのかと大興奮しておりました。

人型じゃなくて植物（触手）っぽい奴ですと答えたら絵に描けと言われたので書きました。

何このエロゲイラスト？　と言われましたが、エロゲイラストって何でしょうか？

ちなみに火の精霊さんや水の精霊さんは小さな人型をしています。そういえば、あの時の夜はフミさんがいつもより燃えていた気がします。

おっと完全に脱線しました。

「え？　何々？　あのエロゲイラスト精霊なんか裏があんの？」

ちなみにさりげなく僕はその精霊を絵本と同じ手に掴んでるんですが、フミさんは精霊が見えないので気付きません。

「小説に取り憑くと官能小説になります」

精霊を絵本に挟んで呪文を唱えるとあら不思議。絵本があつという間に大人向けになりました。

「マジでか!？」

こんなくだらないことを一々喜んでいただけで嬉しいです。とりあえず読んだらお相手してくださいねとの意味を込めて絵本を渡しました。

「おおおっ！ 懐かしい世界！ そして更に凄い！ なんて素晴らしい世界なの！」

ちなみにどんな大人向けになっているのかはその精霊の好みにもよるので、僕は絵本を実際見るまで分かりませんでした。

が、寝台にいそいそと向かって続きを読む妻の脇から絵本を覗いてみると、男の裸体しかありませんでした。

どの項<sup>ページ</sup>を見ても男だけ。

まさか男しか出ていない絵本に変わっているとは。

その個体に関しては絵本を見る限り、筋肉ムキムキな漢<sup>おたく</sup>が好きみたいです。

見るんじゃなかった。

萎えた。

フミさんは興奮覚めやらぬようでした……そっちの世界が好きなのですね。

結婚して5年、妻の新たな一面を知りました。

ヤマナシ、オチナシ、イミナシで略してヤオイと呼ぶそうですよ。確かに意味無いですね、そうですね。

リベンジに違う个体探してこよう……ヤオイ萌えと実母萌えじゃ無い子。

勿論、その日の子作りは諦めました。

だって何か気力と体（主に下半身）がしょぼーんとしてます……。

「精霊さん、違うの読みたいーい♪」

そして数日後、またいそいそと妻のいる寢台に行つたところ、フミさんがいつの間にか、あの漢おとこ萌え精霊使いこなしてるつ……Σ（

Д ;

「というか違う話出してくれるんですか?!

今回は王宮騎士団長と宮廷魔術師の禁断の愛って……うん、まあ別にいいけど。

絵本の中の魔術師の容姿がまんま僕の気をするんですが。

[illegible]

Side:イシュライラの20年後

唐突ですが、上記より15年後経ちました、経ちましたといった  
ら15年経ちました。

大事なことなので二回言いました。

僕が38歳、フミさん47歳です。

フミさんの見た目があまり変化がないんですが、日本人って何者で  
すか？

僕は禿げたら離婚、太ったら離婚と言われたので結構必死なんです  
が？

いまいち分かりませんが、僕たちって相思相愛じゃないのでしょうか？

ペクテーヌ様は召喚するにあたってフミさんの性格自体もいじって  
くれてもよかったと思いますよ！

寢台でも好きとか愛してるって言うてくれないですよ。

最近じゃ四人目は絶対無理としか言うてくれないので愛情不足です  
よー。

100歳になっても産めそうです、フミさんなら！

で、子供たちの近況ですが、例の絵本と精霊の所為で娘のレイ（  
18歳）は、立派なヤオイマンガ家になりました。

マンガとは絵の傍に台詞がついている小説＋絵本のことです。

フミさんの世界にはそのマンガと言う存在が氾濫していたらしくて、  
それを娘に教えたのがきっかけです。

画力かというと、僕が論文を書くときによく魔方陣や人体図を描く  
のでソレも影響していると思いますが、上手だと思います。

流石フミさんと僕の娘だけのことはあります。

息子のヨーゼン（20歳）はというと一応平民議員になって平民  
初の宰相を目指してます。

ただ、あれだけフミさんにゾッコンだった彼が、とある娘さんと結

婚しました。

求婚時の言葉が『あなたが母に似てるので妥協します。僕と結婚してください』だったそうです。

娘さんは隣国ユザド国のお嬢さんで、黒髪のつぶらな瞳の方です。確かにフミさんと雰囲気がよく似ています。

結婚式でお会いした娘さんのお母さんもフミさんと雰囲気が似てました。

歳も多分フミさんと同じくらいです。

しかし娘さん、よく求婚受けたなと思いました。

で、その15年の間にフミさんがもう一人産みました。

（フミさんが）頑張りました第三子は男の子で見事母似です。

名前をキクと言い、宮廷魔術師を目指しています。

しかもこの子も曲者です。

というか三人の中で一番曲者です。

「兄さんってば僕と結婚してくれるって言ったのに！ あんな女と結婚して！ 僕が女になったらもっと可愛いのに！ いっそのこと兄さんのこと女にしちゃうんだから！」

ハイ、見事な兄貴萌え一丁。

（僕の）悲願のフミさん似の為、大層可愛がりましたので将来は僕を超える魔術師になるのが夢です。

しかし、ヨーゼンも嬉々として構ったのが原因でしょうか、兄大好きっ子になりました。

姉レイもかなり構ってたんですけどね。

というかレイもキクに感心示したのはやっぱり母似だからでしょうか？

ということとで台詞でもお分かりの通りキクのもう一つの夢は実兄を嫁（？）にすることです。

現在キクが研究しているのは男を女にする魔法だそうです。

女性的な見た目の所為でヤオイとやらでは女性役なのではないかと思いますが、ところがどっこい男役のようです。

人体実験希望者が腐るほどおります。

希望者は勿論性別が男性であることが条件なので男性ですが、なん  
で男の子なのに男の支援者ばかりよく集まってくれちゃうの？！

男性達が人体実験するにあたり希望するのはその後（女性化後）はキクに面倒見てもらいたいそうです。

要はキクの妻（！）になりたいそうな。

まあ、人の趣味は人それぞれ、十人十色、蓼食う虫も好き好きです。ところでこの研究は僕は止めた方がいいんでしょうか？

ちよつと（フミさんが喜びそうなので）興味があるので共同でも……。

そんな三人の母、フミさんは静観です。母とは偉大ですね。

「キクって総攻なんだあ。すごい！」

あの、ソウセメって何ですか？

褒め言葉ですか？

[illegible]

side：フミの20年後

異世界に突然召喚されてから約20年。

子供たちはというと、マザコンだし、長子だしとなんだかと心配していた一番上の息子が一番最初に普通に結婚した。

私の子供は見事なまでに全員変な風に育った。

長子はマザコン、次子は腐女子、末っ子がブラコン。

未だに夫は元気なので夜が……オバちゃんには耐えられないのY  
O！

体力的にも無理だったし、四人目は魔王が出来るんじゃないかと思  
って流石に勘弁してくれと言ったというか言い続けている。  
つつかもう勘弁しろ。

子供がマザコンって王道設定よねとか思ってるような異世界人の  
母だし、マザコンになるのはしょうがないと思う。

というかその子供の父親もそれなりに変なんだからね。

良い所は金持つてるところだけジャマイカ……あと見た目か。

夫には禿げたら離婚、太ったら離婚と、そんなのと一緒に歩きた  
くないんだから！ と日々脅しております。

夫を紳士という名の美中年になるよう適度な運動と良好な食生活と  
を努力しております。

でも適度な運動と称してにセックスに持ち込む……。

見た目は青い髪と瞳の所為で爽やか好青年なのに、嫉妬深いし、脱  
ぐと細マツチヨだし、エロいこと好きだし、頭良いから口喧嘩では  
勝てないし、魔術バカだから魔法ネタ振るとずっと喋り続けてるし、  
飽きて寝るとお仕置きと称してヤラしいことしてくるし……くそう  
……腹立ってきた。

基本、魔術師って引きこもりだから気をつけないとあつという間に残念な結果になるし。

まあ喋り始まるとただの（魔術）オタクだけど。爽やかな見た目とは裏腹に結構俺様な年下夫に振り回されつつ、たまには振り回しながら、まあ結構それなりに幸せに生きてますよ、ええ。

それにしても異世界って嫁イビリって単語ないのかしら。

長男ヨーゼンの嫁がこれまたぱつと見、日本人っぽい。

なんか大和撫子な感じです。

見た目は確かに私というか日本人系統の顔立ちで……でも性格は私とは段違いに良い子ちゃんです。

返事とかでお育ちがいいことがすぐ分かりますわい。

つつか彼女、貴族の娘さんなんだけど、これがまた面倒くさいので詳細は省く。

とりあえずこんな良い子虐めたら私ってば地獄行きそう。

「じゃあレイラさんは直にでもディリトア国籍取得したいのね？」

今日、私は息子の嫁、レイラさんの今後についてを報告されている。

彼女はユザド国籍なのだがディリトア王国人の妻として直にでも帰化申請する気概らしい。

「ハイ。父はしばらく様子を見てからにしたほうがいいと言っんですけど……私、ヨーゼンさんと離婚するとは思えませんし」

見た目は優柔不断な印象を受けるジャパニーズですが、中身は違うようです。

確固たる意思というものをお持ちなようです。

嫁イビリにも負けなさそうです……って別に虐めないからね？

私にもそんな意思があったらイシュに好き勝手にされないように……  
いや、脱線した。

「……我が息子ながらマザコン……母大好きっ子なのに……よく結婚しようと思ったわね？」

「お会いしたときから運命を感じましたので」

につこりと微笑んで言い切ったー！

強いよ、この子。

なんかふわふわゆるゆるだらだらえろえろ生きてきた私とは全然違う……。

しかし、この言い方だとレイラちゃんはヨーゼンに一目惚れしてくれたのかなあ？

もっと仲良くなったら色々聞いてみよう。

「えーと……とりあえず愚息をよろしくお願いします」

「こちらこそよろしくお願いします、お義母様」

次子、レイ……髪が青いのでアミちゃんとも悩んだんだ、これが大体想像つくと思いますが、上二人の子供たちは漫画の青い髪色のキャラから名前いただいてます。

で、育て方が良かったのか間違えたのかレイは立派なヤオイマンガ家に。

ちなみに私は家で時間があるときは娘の手伝いしてます。  
ベタと点描描きくらいなら手伝えるもん。

「かあさま……ココを黒く塗ってください」

娘は敬語キャラです、容姿もまんま夫の女版ですな。

「はあい」

本日は魔術師の男にムリヤリ召喚された異世界人の男との濡れ場をお手伝い中。

異世界人は日本人のリーマン設定なのでニマニマしながらお手伝いしてますよ。

高層ビルやスーツ等の衣装は私が持てるだけの画力で伝えました。

……地球……日本人がコレを見てたら仲間がいることに気付くと思うんだ。

まあヤオイ好きじゃないと読まないと思うから見えてくれる確率低すぎだけど（笑）

「かあさま……」

「ん？」

「寝台で……裸で寝転んでM字開脚して欲しいんですけど……筋肉のつき方がいまいち分からないので」

「お父さんにやってもらいなさい」

「……ちっ」

聞きました？ いま舌打ちしたよ、この子。  
娘の前で裸になると身の危険を感じます。

私、娘が成長してからおしとやかもとい大和撫子になったと思う！  
人間恥じらいは大切ですよ、ええ。

そして末っ子、キク。

大和男子をめざして某日本さんのお名前を頂きました。  
でも間違った日本男児になりました、スマーン！

「かーさん、女体化の研究するから今日父さんと研究室に泊まるから！」

いや、もうちょつとオブラートに包めえええ！

丁度その場に居合わせた女体化対象である兄ヨーゼンは若干青ざめてます。

キクはヨーゼン一筋です。

シスコンにならなかったのが謎。

「張り切りすぎて倒れないでね」

「倒れたら兄さんに看病してもらっから！」

とりあえずキクは元気っ子。

「……明日から地方行きだから戻るのは4日後だ」

ヨーゼン、ソコは嫌とか言えよ。

「じゃあ4日後に倒れるから看病して」

「いや、ソコまで計算して倒れなくていいから」

堂々巡りになる気がしたので口を挟みました。

「だって兄さんが看病してくれるって!」

「看病するとは言っていないからね! ヨーゼンも変に甘やかさないの」

「ごめんなさい、フミ」

ヨーゼンはいつの間にか私のこと名前呼びです。  
クレヨンし ちゃんを思い出す……。

とりあえずまだ母>弟のようなので兄から嗜めていき、体調崩さないようにと二人の息子心配をし、それぞれ解散。

……複雑だ、嫁のレイラちゃんはどの位置に入るのか怖くて聞けねえ……。

結婚するくらいだし、レイラ>母>弟だよなあ?

「かあさま……」

「わひゃあ!」

変な叫び声をあげてしまった。

夫と息子二人が外出し、残ったのは娘と私。

その娘が後ろから抱きついてきた。

娘は5尺7寸(約172cm)ほど身長があり、私より頭一つ分ほど背が高い。

……嫌な予感がしますう……。

「タカヤのこと女体化するから裸でM字開脚してください」

タカヤとは娘の描く漫画のリーマン主人公（受）のことです！  
今の会話聞いて何か閃いたようですよー。  
とりあえず……逃げる！

「買い物行つて来る！」

そう言うやいなや風の精霊さんが魔法を手助けしてくれて瞬間移動  
で私を商店街まで運んでくれた。

風の精霊さん、ホントにありがとう。

娘の舌打ちが聞こえる気がするけど、多分締め切りが近いから追つてこないと思います。

夫の施す他の男に対するガードは鉄壁だけど、一番手厚くガードして欲しいのは娘なんだよなあ。

娘から狙われるのは異世界トリップの王道とはかけ離れてるわ……。私の身の安全のためにも早く娘にも素敵な恋人が見つかりますよーにつ！

勿論キクにも見つかりますよーにつ！

……そんな感じのちよつと疲れる日常です。

番外編 王道らしく子供が出来ました！ 全員曲者ですが何か？（後書き）

ということだ二世のお話。

曲者ぞろいですが何か？

子供の名前は、

ヨーゼン…藤崎センセのほーしんえんぎ。

レイ…あのエヴァ。厳密には髪青くないと言わないように。

キク…国家擬人化漫画の日本人から。

イシユライラがナチュラルに俺様属性とところどころヘタレって言うのが書いて満足です。

これにて完結です。

が、この夫婦は他の話にもちょこちょこ出てくるので見かけた際にはよろしくです。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5321q/>

---

女神様の落し人

2011年6月9日12時50分発行